

たじみん昼話 101

合格するための推薦試験の面接やプレゼン法 その1

推薦入試の形式は、グループディスカッションや1時間に渡る教授との問答、他の受験生にプレゼンする様子を評価するなど様々だ。共通する評価観点は、相手を納得させる力の有無だ。プレゼン能力は、大学入試に限らず社会で生きていくために必須の能力なので、良い機会だと考えて積極的に身に付けて欲しい。

以下に、プレゼンをするにあたって、最低限必要な3つの観点を述べる。

①プレゼンには、内容と結びついた自分の体験や思い考えを、必ず入れる。

※例→世の中にはこの課題があり、○○すれば解決するので良いと思う。

→プレゼンする相手は受験生以上に知識がある教授や大人等だ。このプレゼンによる課題や分析レベルでは、調べれば誰でもわかるものであり高評価は得られない。

○例→「私は○○体験をしてきて、○○なことを思った。○○活動をして、それを基に将来はこういうことをしたい。」

→随所に自分という主語を入れて、分析的・論理的で自分以外には語れないプレゼンをすることだ。「なぜ自分がそう考えるようになったか」「そう考えた自分が高校時代に何をしたか」「なぜ自分が語るのか」を明確にすることで、説得力が増し高評価が得られるのだ。

②プレゼンに対する質問を20ほど想定し、その回答を徹底的に考え抜く。

「自分のプレゼンの突っ込まれそうな所」「他人が理解できない所」「一番伝わりにくい所」「来そうな問い」を徹底的に考え質問を想定し、どこをどう聞かれても回答できるようにする。

尚、「ここが突っ込まれるからこの論拠を補強しよう」「この点をわかりやすく伝えるために、この表現をしよう」という質問の想定と回答作りは、プレゼンのクオリティを高めるのでぜひ実践して欲しい。ちなみに、学会の発表での桔梗の常とう手段は、自分の土俵に持ってくる攻撃的プレゼン作戦だ。これは質問して欲しい所のプレゼンを不鮮明に(穴を作って)して質問をそこに誘導するものだ。変な質問の防衛にも効果的だ。

③プレゼンに使用する言葉の定義をはっきりさせる

自己肯定感の意味は、「自信」、「前向き」、「期待」、「信頼」、「信用」と、人によって微妙に異なる。このように言葉の意味は人によって齟齬があることが多く、特に評価者である大学教授はシビアに拘るので、使用する言葉の定義は正確にしておくべきだ。対策は3つある。第1は、言葉に気を付けて言葉の感度を高める生活を心掛けることだ。第2は、プレゼンの中で解釈が微妙に異なる可能性がある言葉をチェックして、その言葉の定義の一般解釈と自分が使用する意味との相違点を正確に語れるようにすることだ。第3は、意味の解析が困難なら、他の適切な言葉に置き換えることだ。

まずは取り組むことから始めよう。実践あるのみだ。